

かずさの博物誌

ソリハシセイタカシギ

～清そな姿～

文・写真／成田篤彦

2017.10.20

今年五月、市街地の湿地、十数台の車が農道に駐車しています。車は袖ヶ浦、千葉、習志野、世田谷、足立、多摩、横浜、湘南、相模、浜松、春日部、野田、大宮、土浦など関東地域のナンバーです。また、広島ナンバーの車もありました。

「東京湾横断道路はいくらだったの？」と熟年の男性。

「あ！君もきたの？ここまで何時間かかった？」と熟年の男性。

「昨夜メールを見て、四時起きでやってきた」と若い男性。

関東地域の野鳥愛好家グループたちのおしゃべりなのでしょう。口数は少ないのですが、楽しそうです。

さて、十数名のカメラマンが、大きな望遠レンズで、水が溜まっているハス田跡の奥に焦点を合わせています。

そこに、ハトより一回り大きい一羽の白い水鳥がくちばしを水中に挿し、頭を左右に振って、歩き回っています。

白色の地に黒い嘴と頭、はねの縁が黒、足が長く、くちばしも長く、その先が反り返っています。



©成田篤彦

▲ソリハシセイタカシギを撮るカメラマン
＝2017年5月12日 木更津市



©成田篤彦

▲えさを捕るソリハシセイタカシギ＝2017年5月31日 木更津市

ソリハシセイタカシギに間違いありません。日本では珍客中の珍客です。ときどき、水中から米粒ほどの透明なものを摘みだし、飲み込みます。

このシギはその動きをわき目もふらずに続けながら、ハス田のあぜを越えて、隣のハス田に行くとかメラマンたちは三脚を抱えながら、カメラを移動します。

このシギが同じ動作を繰り返して、変わった動作をしないので、カメラマンは二～三時間で撮影を切り上げ、帰っていきます。しかし、次のグループがまた、やってきます。

この状況が、この一羽のシギが去るまで、約一か月間続きました。恐らく休日には約一〇〇名のカメラマンがやってきたと思います。

これほど多くの方が、この狭いハス田の農道に押し寄せたのは初めてです。

このシギが、なぜ、これほど野鳥愛好家を引き付けるのでしょうか？

このシギはユーラシア大陸の温帯地方で繁殖します。大陸ではそれほど珍しい鳥ではないようですが、日本では渡りの途中に通過するか冬にやって来る鳥で、滅多に訪れませんが、また、この水鳥が写真を見てわかるように実に清そで美しい姿をしています。

遠方においても「一目見たい。撮影したい」と思う気持ちはとてもよくわかります。しかし、地元の方の生活や他の鳥の繁殖に悪影響がでないように心掛けたいものです。

この狭い、市街地のハス田の湿地に現れたのは、近くに広大な小櫃川

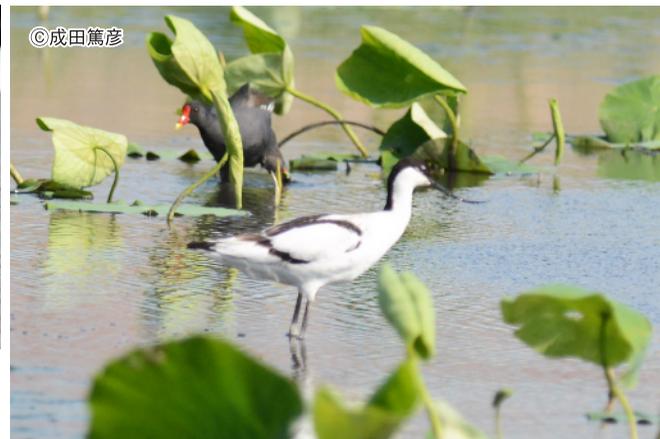
河口干潟があるからだと思っています。

実は、小櫃川河口には別の一羽が来ていました。

水鳥たちにとってこの干潟と湿地の組み合わせの重要性を改めて、感じました。

▲ソリハシセイタカシギとバン（奥）

＝2017年6月4日 木更津市



©成田篤彦



©成田篤彦

▲ソリハシセイタカシギ 小櫃川河口
＝2017年5月4日 木更津市

memo

ソリハシセイタカシギ チドリ目セイタカシギ科

全長約四十四センチメートル。繁殖地はヨーロッパから中国東北部にいたるユーラシア大陸の温帯地方。とりわけ、中央アジアやモンゴルなどのステップ地帯に多い。ヨーロッパでの繁殖地はきわめて局所的。冬はアフリカやアジアの南部で過ごす。日本では木曾川河口の鍋田干拓地で一九七二年一月に初めて観察された。千葉県谷津干潟などで記録がある。塩水域や海岸の干潟、入り江などを好む。海中の小動物を主食としている。

参考文献 アサヒブルー週刊世界動物百科 一〇四号朝日新聞社